〔伊呂波字類抄 奴人體〕髻 ヌカ、ミ、亦ヒタヒカミ、

〔増補下學集 上支體〕〔ヌカミ〕額前髮也

〔書言字考節用集 五肢體〕〔ヌカミ〕額前髮也、 髻 〔マヘカミ ヒタイガミ〕

〔源氏物語 二帚木〕心ふかしやなどほめられて、あはれすゝみぬれば、やがてあまになりぬかし、思ひたつほどは、いと心すめる樣にて、世にかへり見すべくもおもへらず、いであなかなし、かくはたおぼしたりにけるよなどやうにあひ見れるひときとぶらひ、ひたすらにうしとも思ひはなれぬをとこき、つけて、涙おとせば、つかふ人ふるごだちなど、君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身をなどいふに、みづからひたひがみをかきさぐりて、あへなくこゝろぼそければ、うちひそみぬかし、

〔松屋筆記 百三〕額髮〔ヒタヒガミ〕

與清曰、額髮は男女ともに、額にある髮の總名也、尼にもいふは、垂尼〔タレアマ〕とて、振分髮などやうに切たる髮なれば、額髮も有し也、男子もいにしへは總髮なれば也、髻〔ヌカヾミスヾシロ〕髻、いづれもおなじ額髮なれど、髻は小兒の前髮にて、目ざしともいふこれ也、髻は額髮の事也、又和名抄十四卷ノ容飾具部ニ、釋名云、蔽髮蔽髮前爲飾也、和名比太比、とあるものは、女房の額の飾具なり、又上古ヒサゴ花にも結し也、

〔歷世女裝考 三〕額髮を剪垂、耳はさみ、

前にも引たる源氏葵の卷、紫の上髮そぎの所に、いとながき人も、ひたひがみはすこしみじかくぞあめるとあるは、髮のたけは長くとも切たらず、額の髮毛は短きものぞといふことなり、是乃髮截〔ハンセツ〕なり、

〔歷世女裝考 三〕髮のさがりば

サガリバ